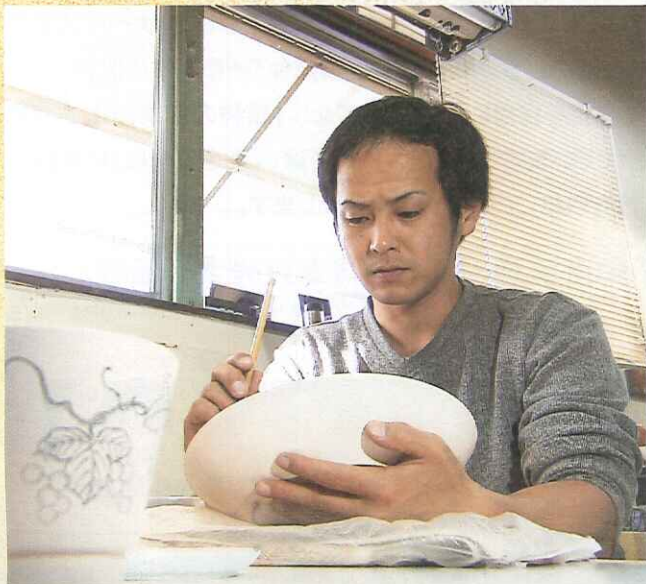


日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow



Takahiko Kawasoe

1981年、佐賀県で鍋島をつくり続ける家に生まれる。県内の窯業大学を1年で中退するが、一念発起して叔母で伊万里・有田焼伝統工芸士の青木妙子氏に入門。一級技能士の資格を持つ。



## 伊万里焼 (いまりやき)

伊万里市内の窯元で作陶された焼き物で、その礎となったのが鍋島。鍋島は江戸初期から、鍋島藩が将軍家への献上品としてつくられた最高級の磁器で、山奥に窯元が置かれたのはその技の流出を防ぐためだった。



# 伊万里焼絵付師

川副隆彦 氏

限られた色で、自然の彩りを鮮やかに描く。

佐賀県の山深い郷で、約300年前からつくられてきた焼き物がある。日本が世界に誇る伊万里焼のルーツであり、かつて將軍家に献上された鍋島だ。川副隆彦さんは、この地に連綿と伝わる技を極めるべく、日々研鑽を積む若き職人。窯元の長男として生まれたが、初めは家業に興味を持てなかつたという。

があり、その染付には巧みな筆さばきが欠かせない。筆を立てて絵の具を塗り、筆を寝かせて余分な絵の具を吸い取る。この手業を繰り返して、青色の濃淡だけで全てを表現する。絵の出来は生地に含まれる絵の具の量によるため、焼くまで分からない。絵付師は自らの経験と勘をたよりに描くのである。窯入れが終わると次に色鍋島に移る。焼かれて艶を持った染付に加え、上絵付によって色を付ける。

絵柄のまわりに文様の影りを施すなど、さまざまな手法に取り組むことで技と感性をさらに高める。目標は？

川副「課題はまだ多いですね。特に染付、青一色の濃淡で自然の彩りを描くのは至難の業です。これからも、良きライバルである従兄弟と切磋琢磨しながら腕を上げていきたいですね」

点描で桜の花弁を表し、柔らかな線で満開の花びらを描く。それを終えると、緑と黄の絵の具で葉や他の花を色付かせ、いよいよ最後の焼きを施す。青、赤、黄、緑の四色だけで多彩な絵柄を生むのが、今も昔も変わらぬ絵付の真骨頂だ。

先人が残してきた技を極めるのは、決してたやすいことではない。進めば進むほど、その先は長く険しい。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

川副「焼き物づくりが地味に思え、中途半端な気持ちで入った窯業大学校も中退してしまいました。考えが変わったのは、兄弟のように育った三つ上の従兄弟が、ろくろを懸命に回している姿を見たこと。己の甘さに気付かされると同時に負けたくないと思い、自分には絵付を極めようと思えました」

しかし、川副さんがこだわるのは伝統だけではない。歴史的な図案を基にしながらも、そこにはない表現を取り入れて個性を追究している。また、

絵付は、大きく「染付」と「色鍋島」

優れた絵付師を目指し、新たな挑戦に取り組む姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。

※2012年12月取材。掲載内容は取材当時のものです。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版  
パソコンやタブレットでもご覧になれます。本紙掲載以外に、多数の若者達をご紹介しています。

アットホーム明日への扉 検索



TV番組  
ディスカバリーチャンネル (CS)  
冠番組  
「アットホーム presents 明日への扉」放映中  
毎週金曜日 22:53~23:00



ビジョン  
ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!! 最新号のご案内 好評公開中

No.059 / 鍋島緞通織師 入江 真梨子 氏